

提婆達多の今様

——『梁塵秘抄』法文歌の一性格——（承前）

植 木 朝 子

〈提婆達多礼讃〉

昔の仙こそあはれなれ 法華を弘めずなりにせば 人もわが身も今までに 声だに聞かずなりなまし（一一八）

この今様は、反実仮想の形をとって、提婆達多を讃えている。達多は釈迦によって成仏したと歌う三五番歌や一一四番歌、あるいは悪人達多が実は、前世では釈迦の師であったのだ、とする一一一番歌からよりすすんで、達多を中心に据え、その法華宣説を讃えているのである。「昔の仙こそあはれなれ」の「あはれ」は、奥の深い言葉だが、

弥勒菩薩はあはれなり 天人大会の前にして 昔の仏の有様を
文殊に問ひつつ説いたまふ（六一）

阿難尊者はあはれなり 慈悲の室を住処にて 忍辱衣を身に着
つつ 諸法空を御座として 人に教へて知らしめよ（九五）

提婆達多の今様

不軽大士ぞあはれなる 我深敬汝等と唱へつつ うち罵り悪し
き人もみな 救ひて羅漢と成しければ（一四一）

などのように、最初に特定の仏・菩薩・聖人などを「あはれ」である——ありがたく尊い——とっておいて、その内容を具体的に示すという型の今様が多く見られる。一一八番歌も同じように考えられるが、これまでの注釈書のうち、新編全集は「あはれなれ」に「提婆達多が五逆の罪で地獄に堕ちたまま苦しむことをふまえる」と注する。すなわち、気の毒だ、かわいそうだ、というような意味を持たせているように思われるが、訳では「感銘深く思われるよ」としており、提婆達多への同情が強く訳出されてはいない。

この一一八番歌は、提婆達多をこそ中心に据えてその法華経宣説を讃えているものだが、この表現は、法華経の、「時の仙人とは、今の提婆達多これなり」という淡々とした記述を明らかにこえた提

婆達多への思い入れが感じられ、説話や唱導で強調される提婆達多の悪事をまるで忘れたかのようである。「洞」の語について見た時は、今様の表現と唱導の表現が重なりあうことを指摘したが、先にふれたような唱導資料において、提婆達多の悪逆は人々がよく知っていることを前提として、

調達造逆罪受記別於当来。龍女感音身定蓮台於無垢云々。

提婆達多之悪逆、観音サタ之慈悲。周梨盤特之愚癡、大聖文殊之智慧。

提婆達多泥梨之炎ニハ、施天王仏之面目。 (以上『肝心集』²⁷)

此経ニヨリ、五逆ノ調達モ五障ノ女人モ成仏スルトハ説タマヘリ。 (『法華経勧進抄』²⁸)

悪人ト申ハ達多ヲ手本トス。 (『草案集』)

のようにしばしば見えている。釈迦に害を及ぼす点は、前世でも同じで、阿私仙人としても、釈迦にことさらつらくあつたっている。

寒林衣モ薄キ暮レハ、叩氷汲キ水、群山ニ雪深キ朝ニハ、向テ嵐ニ荷キ薪ヲ。日々勸責音ハ銘シ求法ノ肝、年々ノ打捶ノ涙ヲ洗フ利生ノ眼。一日二日ノ供給カハ、遙ニ千歳ノ給仕リ、一年二年ノ苦行カハ、遠ク数百年ノ奉仕也云々 (『花文集』)

供給走使トハ事ニコソ言ハメ。採菓汲水莊嚴ヘキ事トハ覚候ハヌニ、伴ノ阿私仙人、以外ノヒスカシナル物ニテ、不可思議モ

タキクルシウアヤニクナル事ノミ申シヲキテケル候。雲ヲソケテハナク／＼高キ峰ノ薪ヲ拾コノ。此ヲ哀トモ不云。占檀檀樁披ナラストテ取捨ツ凍ヲタ、イテフル／＼深谷水ラムスフ。此ヲトラシトモ不云。八功德池ノ流ナラストテキラヒ返事ノ外ナルアヒダテナサトコソ覚候。乃至以衆而作牀座等々以身為床ト、仙人ハ起ヌ伏ヌセサセ給シ候。サレドモ此ニモシヒズ、此ニモコリズ打杖ノ強ニモ哭レキ。可得仏道事近コト覚エテ四言詞ノケヤケキモ悦カリキ。可聞一乘期ノ至ヲト覚ヘテ、カヤウニツカヘ／＼テ慥ニ送千才、適聞一乗給ヒキ。 (『草案集』)

『草案集』では、提婆達多を傍線部のごとく、たいへん心のひねくれた者で、ひどく意地悪なことばかり申しつけた、とまで言っている。このような記述と比べると、一一八番今様の手放しのほめ讃え方が際立ってこよう。

最後に、提婆品を題とした釈教歌と、説話集に見える提婆達多を確認しておきたい。

題に提婆品と明記される和歌の、中世までの用例の一部を以下に掲出する。

提婆品の心をよめる 瞻西上人

のりのためになふたきぎにことよせてやがてうきよをこりぞはてぬる (『金葉集』二度本)

提婆品の心をよめる

僧都覚雅

ちとせまでむすびし水も露ばかりわが身のためとおもひやはせし
〔千載集〕

提婆品の心を

寂然法師

なにとなく涙の玉やこぼれけん峰の木のみをひろふ袂に
〔新統古今集〕

提婆品

☆みな人を仏の道にいれつれば仏のあだも仏なりけり

さはりおほみなみを分けこし身をかへて蓮の上に入るとこそみれ
〔公任集〕

提婆品

☆よそにこそあだとみゆともとせまでつかへしなかはへだてし
もせず
〔忠度集〕

又人のもとに一品経供養せし時、提婆品のところを

袖のうへの玉の光のほどもなく南の空の月とすむらん
〔長秋詠藻〕

提婆品

皆因提婆達多

☆ありしむかしわれみちびきし山人をけふはあだとや人の見らむ
提婆達多の今様

又聞成菩提

きみも仏われも仏になるならばくるしむ人はみなのがれなむ
わたつみや月はすみぬときくからにおなじ光は猶山のはに
たれかしらんわが身を人にいひかけてよせくる浪の底のふかき
を

を

竜女成仏

玉ゆららに出でぬと見えし海の月のやがて南にさしのぼるかな
わたつみややがてみなみにさす光玉をうけしにかねて見えにき
〔以上『拾玉集』〕

報恩会、提婆品

わたつ海のそのたまもにやどかりて南の空をてらす月影
〔拾遺愚草〕

絵画化される場面と同様、阿私仙人給仕と龍女成仏の二つが主な題材となる。龍女成仏については、海、南、月の語をつかって表現することが多い。阿私仙人給仕を主題としたものは、先にふれた拾遺和歌集の行基菩薩の歌同様、水を汲むこと、木の実を拾うこと、薪を切ることを入れ込んでいくのが大勢である。提婆達多その人に焦点を当てる詠歌のうち注目されるのは、☆を付した三首で、これらには一一四番今様に含まれる「あた」の語が見えている。提婆達多を「あた」とする表現は、法華経はもちろん、管見の範囲の唱導

資料などにも見当たらなかったが、釈教歌の中にわずかながら例が見られる。一―四番今様に關して、新間進一が公任の和歌を引き、

仕えて法華經を得た。

「この釈教歌の表現を採りこんでいよう」と指摘しているが、これを積極的に支持したい。さらに、忠度と慈円が同様の表現を使っているが、忠度の兄に白拍子を寵愛した清盛がいることや、先にもふれたように、慈円が今様を創作していることなどを考え合わせると、

・今昔物語集（一一二〇―四〇年代）

卷一―第一〇話 提婆達多は仏と争い、地獄におちた。

卷一―第二七話 提婆達多は阿闍世王をそそのかし、その父を殺害させる。

卷五―第七話 国王を殺そうとした羅睺大臣は今の提婆達多である。

卷五―第八話 大光明王（今の釈迦仏）を殺そうとした隣国の王とは今の提婆達多である。

忠度や慈円は提婆達多を「あた」とする表現を公任の和歌のみならず、今様からも触発されて自らの詠歌に取り入れたのではないだろうか。

卷五―第一〇話 国王（今の釈迦仏）を針で突き、その痛みに耐えた王に法を教えた仙人は今の提婆達多である。

次に説話の中に出てくる提婆達多の姿を見ていきたい。以下、管見に入った提婆達多を中心に据えた説話について、説話集成立順に並べ、概要を記した。

卷五―第一八話 大河で溺れかけた男が九色の鹿に助けられた。その存在を口外せぬと約束したのに、男は大王に告げ、鹿は射殺されそうになるが、事情を知った大王は鹿を殺さずに去る。九色の鹿は今の釈迦仏、溺れかけた男は今の提婆達多である。

・往生要集（永観二年（九八四）十一月―寛和元年（九八五）四月）

提婆達多は六万歳の経を読んだが地獄に落ちることをまぬがれなかった。

・法華百座聞書抄（天仁三年（一一一〇））

提婆達多にも仏性がある。

・注好選（十二世紀初）

中・第三 提婆達多は昔の阿私仙であり、前世の釈迦は千年

・宝物集（治承三年（一一七九）後数年間）

卷二 提婆達多は釈迦の脛をうった。

卷四 釈迦は提婆達多が仏に危害を加えたことを恨まなかった。

卷五 提婆達多は第三禪（色界における四つの禪定のうち、

第三の禪定によって到達する境地。離喜妙楽といい、通常の喜びを超越した真の喜びを感ずるといふ）の樂

しみを得たが、それも極楽の樂しみにくらべれば、阿

鼻地獄の底に匹敵する。

・私聚百因縁集〔正嘉元年（一二五七）〕

卷一―三 昔、大王（今の釈迦仏）に法を教えた阿私仙は今

の提婆達多である。

卷二―五 阿難尊者は兄の提婆達多を訪い、教化した。

卷三―一 提婆達多は五百比丘をさらって象頭山に籠もった。

・沙石集〔弘安六年（一二八三）〕

卷五本（四） 鹿王（提婆達多）の領する鹿のうち、子を身

ごもっているものが、国王の供御に当たった。

別の鹿王（釈迦）はその身代わりとして、自ら

国王のもとに赴いた。

・雑談集〔嘉元三年（一一三五）〕

提婆達多は三逆を行い、地獄に墮ちた。

釈迦の成道は提婆達多の博識に対抗した結果である。

提婆達多の今様

釈迦と提婆達多は正反対の方便で、人々を救った。

・三國伝記〔十五世紀前半〕

卷一―一 提婆達多は釈迦と諸芸を争った。

卷一―四 昔、国王（今の釈迦仏）に法を教えた仙人は今

の提婆達多である。

卷七―二八

提婆達多は死後、地獄に墮ちた。提婆達多の弟

子とその墓を毎日廻ったが、地獄での苦しみが

ますますひどくなるので、提婆は舍利弗に頼ん

で、墓参りをさせないよう伝えさせた。弟子は

怒って舍利弗を殺害した。

『往生要集』では、いくら多くの経を読んでも地獄に落ちること

を免れなかった、と達多の悪の面を強調している。『法華百座聞書

抄』は達多の墮地獄を前提とはしているが、その達多にも仏性がある

のだ、とする。『注好選』は、法華経提婆品に記される釈迦の阿

私仙人給仕を語るが、法華経には見えない、仙人の厳しい仕打ちを

殊更に記している。これは、先に見た『花文集』や『草案集』などの

唱導資料と同様の形式である。『今昔物語集』には多くの提婆達

多説話が見えるが、いずれも提婆達多の悪事を具体的に記し、極悪

人としての達多像が定着していることが窺われる。卷五の第十話は

前世の釈迦と阿私仙人の交渉を語るが、仙人は九十日の間、毎日五

回あるいは五十回、針で釈迦の体を刺す。水を汲む、薪を採るといった、仙人の身の回りの世話をさせるどころか、ひたすら針で刺すという、『注好選』にみえる、鞭で打つよりもさらにひどい仕打ちをするのである。これに耐えた釈迦の、法を求める気持ちの強さを強調する意図があると思われるが、その一方、読者には、提婆達多のひどさ、悪人ぶりが印象づけられる。この、針でさされるという話は後の『三国伝記』巻一第四にも見えるが、そちらでは一貫して毎日五十回となっている。さて、次に『宝物集』を見てゆく。巻二にみえる、釈迦が提婆達多に脛を打たれたという話は『注好選』の流れを汲んでいる。巻四には、釈迦が自分を傷つけた提婆達多を恨まなかったという記述が見えるが、これは、敵であることを問題にしなかった、という一四番今様の表現と一脈通じるところがあるように思われる。ここで興味深いのは『宝物集』の撰者・平康頼が、今様の名手として名高いことである。康頼は後白河院に近侍して今様の習い、その声の美しさを院から評価されている。『宝物集』には、今様と共通する特徴的な表現が散見するが、この提婆達多に関する記述も、表現そのものが全く一致するというわけではないが、発想の基盤を同じくしているとみてよいのではないだろうか。時代は下るが、今様との関係で注目されるのは『雑談集』の記述である。「釈尊ノ成道モ、提婆ノ知識ニ酬ヘタリ。皆怨ハ中々知識タリ」と

あり、「あた」という言葉をつかって、それがかえって善知識となつて仏道へ導くことがあるのだ、としている。さらに「在世ニ釈尊ト調達ト必ズ出世シテ順逆ノ方便ニテ、世々ニ済度シ給フ」とあつて、提婆達多の悪行も方便だとする把握、すなわち提婆達多をより積極的に尊ぶような把握が見える。

また、先に見た、阿私仙人の住処を「ほら」とする表現に関連して、説話では阿私仙人の住処をどのように表現しているかを確認しておく。今様以前では『注好選』に「仙の室^{③①}」という表現が見える。その後はかなり下つて、『私聚百因縁集』巻一―三に「阿私仙の洞」の例が見える。『三国伝記』巻一―四の「仙室」を形容する中に「白雲ノ洞ノ裏ニハ禅席ノ石既に旧ク^{③②}」とある。

以上述べてきたことをふまえて、提婆達多の今様の特徴をまとめると、①悪人提婆達多への共感、②仏の世界への一体化、③具体的実感的表現、の三点にまとめられよう。まず、第一点は、提婆達多のような悪人に関心を寄せ、悪人でも実は前世では釈迦の師であつた、とか、来世は仏になるのだ、とか、法華経を説いたのはほかならぬ達多なのだ、というように、一首の中心に達多を置いて、そのたたえるべき側面を強調しているということ。第二点目に「われ」「今日」といった語で、過去の物語と現実の自分たちを重ねていくということ。さらに、第三点目として「洞」といった具体性のある

言葉を使ったり、繰り返しの表現で苦勞を強調するなど、実感のこもった表現をしていくこと。これらは今様の特徴として提婆達多を歌うもの以外についても言い得ることと思われる。そしてこのような表現のはぐくまれた背景には、僧侶たちによって行われた、学問的な經典の解説やその成果としての書物だけでなく、むしろ、より広い階層の人々が身近に接することのできた唱導のようなものがあり、また經典の内容を絵画化した法華經美術のようなものがあったと考えられる。また、「あた」の語についてふれたように、釈教歌の影響も無視できないものであろう。

こうした様々な表現の工夫をしながら、なぜ提婆達多は今様に繰り返し歌われたのだろうか。

今様は、貴族社会においては、相対的に低い階層から生まれてきたものと考えられるが、寺院や僧侶への布施、仏像や経の供養が可能な貴族が、そうした功德によって地獄をまぬがれる手段があったのに対し、いわゆる一般庶民には地獄は必定であった。功德を積む金銭の余裕はなく、生きるためには殺生その他の罪をおかさざるを得ないからである。『梁塵秘抄』には鶉飼を歌った次のような今様がある。

鶉飼はいとほしや 万劫年経る龜殺し また鶉の首を結び 現世はかくてもありぬべし 後生わが身をいかにせん (三五五)

提婆達多の今様

鶉飼は悔しかる 何しに急いで漁りけむ 万劫年経る龜殺しけむ 現世はかくてもありぬべし 後生わが身をいかにせんすらむ (四四〇)

これは鶉の餌にする龜を殺し、鶉の首をしばって鮎をとらせる、という幾重にも重なった鶉飼の罪を歌い、地獄に落ちるべき身を、歌い手自身に重ね合わせて嘆いたものである。また、

わが身は罪業重くして 終には泥犁へ入りなんぞ 入りぬべし 佉羅陀山なる地蔵こそ 毎日の暁に 必ず来りて訪うたまへ (二八三)

のように、地獄必定を前提とした上で、唯一地獄に訪れる菩薩である地蔵への信仰心を歌ったものもある。このような人々の罪の自覚が、極悪人提婆達多への強い関心と、その積極的評価を生むものとなったのではないだろうか。地獄は必定という觀念を背景におくと、一一八番今様の「あはれなれ」について新聞進一が「五逆の罪で地獄に堕ちたまま苦しむことをふまえる」とする読みもうなづけるように思われる。

今様を支えた人々は自らの罪を自覚しているからこそ、ことのはか、極悪人提婆達多に共感を寄せ、その悪事よりも釈迦の師であったという輝かしい過去、あるいは仏になるという未来を捉えて、驚きとともに称賛している、と考えられるのである。

注

- ②7 真福寺善本叢刊四『中世唱導資料集』（臨川書店 二〇〇〇年）による。
- ②8 真福寺善本叢刊二『法華經古注釈集』（臨川書店 二〇〇〇年）による。
- ②9 新日本古典文学大系『宝物集 閑居友 比良山古人靈託』（岩波書店 一九九三年）に指摘がある。拙稿「地蔵の今様―『梁塵秘抄』四十番歌とその前後―」（『梁塵 研究と資料』第一八号 二〇〇〇年二月）において、『宝物集』と『梁塵秘抄』今様の表現の類似について簡単にふれた。
- ③0 中世の文学『雑談集』（三弥井書店 一九七三年）による。
- ③1 新日本古典文学大系『三宝絵 注好選』（岩波書店 一九九七年）による。
- ③2 大日本仏教全書 第九十二卷（鈴木学術財団 一九七二年）による。
- ③3 中世の文学『三国伝記 上』（三弥井書店 一九八七年）による。